

## スポーツに起因する下顎骨骨折様式に 及ぼす親知らずの影響

研究代表者 大阪大学歯学部附属病院 飯田 征二

スポーツ競技中に顔面や口腔に外傷を受ける頻度は高い。中でも、下顎骨骨折は永続的な機能障害をひきおこすので、発育期にある思春期においてはとくにその予防に努める必要があります。本研究では過去において治療を行ったスポーツに起因する下顎骨骨折症例について臨床的に検討しました。とくに下顎埋伏智歯（親知らず）の存在が下顎骨骨折に対していかなる影響を及ぼしているのかを検討しました。検討の結果、“親知らず”を保有する場合に下顎骨骨折の頻度が有意に高いことが明らかとなりました。とくに根尖が下顎角部方向に向けて出ている場合や、下顎角部が“親知らず”によって広く占拠され、下顎の骨面積が少ない場合に骨折の頻度が高いことがわかりました。思春期以降の世代での“親知らず”の保有率は高いため、スポーツを行うこれらの世代の競技者、あるいは指導者に対して“親知らず”のもつ危険性を周知させることは、スポーツ顔面外傷における下顎骨骨折の発生を抑制する上で有効と判断されました。



親知らずはスポーツ中の下顎の骨折を引き起こしやすい

下顎埋伏智歯	下顎顎角部骨折			
	あり	なし	合計	%
保有側	19	36	55	34.5
非保有側	3	14	17	17.6
埋伏智歯の状態				
遠心傾斜	0	2	2	0
垂直位	0	5	5	0
近心傾斜	15	18	33	45.5
水平位	1	6	7	14.3
歯根未完成歯	3	5	8	37.5